

## 新約聖書 ヨハネによる福音書 15章9節—17節（新共同訳）

<sup>9</sup>父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。<sup>10</sup>わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

<sup>11</sup>これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。<sup>12</sup>わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。<sup>13</sup>友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。<sup>14</sup>わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。<sup>15</sup>もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。<sup>16</sup>あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。<sup>17</sup>互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「友」

ヨハネの手紙 一には、十字架に極まるイエスの愛によって初めて、自分たちは、愛とは何であるかを知ったと記されています（1ヨハネ 3:16）。そのように、イエスの十字架において示された愛を、福音書記者たちは「アガペー」というギリシア語で表現しました。「アガペー」とは「神の愛」「無償の愛」という意味合いです。彼らはそこに、自分たちがそれまで知っていた愛とは、全く違った愛の姿を見たのです。

彼らが、イエスにおいて初めて知ることができた愛とは何でしょうか。私たちがイエス・キリストの十字架において知るのとは、敵対する者、自分に危害を加えてくる者に対しても注がれる無条件の愛です。それは自分にとって憎むべき相手、とても愛することなどできない者に対しても注がれる、無償の愛です。

元来、生まれながらの私たち人間は、そういう愛を知りません。私たち人間の知っている愛は、相手の持っている何らかの価値に向けられる愛です。それは、自己中心的な愛なのです。

デンマークの19世紀の哲学者であるキルケゴールは、『愛のわざ』という著作の中で、詩人の愛とキリスト教的な愛の区別を説いています。詩人の愛は「歌われた愛」であり、キリスト教的な愛は「命じられた愛」であるということです。詩人の愛は、愛する対象を美しく歌い上げ、賛美します。ロマンをもっ

て情熱的に愛し、冷めれば離れて行く。しかし、キリストの愛は違います。キリストの愛の礎となっているものは、何よりも、師が弟子たちの足を洗い、友のために自分の命を捨てるという愛であり、自分を憎む者、自分を脅やかす敵へも注がれる無償の愛・無条件の愛です。

キリストの愛を知り、その中にとどまろうとする者にとって、無条件に人を愛するとはいかに困難なことであり、人間にとっては不可能にも思えることであるかが痛感されるのではないのでしょうか。

また、キルケゴールは、こうも述べています。「世間では愛は人間と人間との間の関係であるというが、キリスト教の教えによれば、愛は人間と神との間の関係であるという。というのは、神が愛の媒介であるからである」。

これは、人間と人間同士の間にも、神の愛が媒介しているということではないのでしょうか。それは人間同士だけのことではなく、そこに神の愛が介在しているのです。

イエスは弟子たちにこう言いました。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 15:12）。これは、私たちが自分の知っている愛によってではなく、イエスが私たちを愛したのと同じ愛を持って、私たちが互いに愛し合うようにというイエスからのメッセージです。

イエスに愛される者同士にも、同じように愛が、それもイエスが愛したその愛が実現するのです。互いの愛はイエスの愛によって、枯れることなく、一瞬一瞬に、現実に力づけられていくのです。

愛は、実りとして実現されることによって尊さを増していきます。愛は力強い決意であり、祈りです。人間的には不可能と思われることが、悔い改めと祈りによって命じられ、可能なこととされるのです。この愛の中にとどまる場所に、あなたがたの喜びが満ちあふれるのだ、とイエスは私たちに宣言されます。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」。ここでの「友」とは、「愛する者」という表現に置き換えることもできます。「愛する者のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」ということです。ここで述べられていることは、十字架上で命を捨てるイエスの愛についてです。このイエスの愛が最大の愛であり、ここで弟子たちは「友」と呼ばれています。

「友のために自分の命を捨てること」と言うように、ここでは敵のために命を捨てるといった、直接的な敵への愛は表されていません。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」と言うように、イエスの愛は父なる神を根源とするものであり、イエスへの神の愛が、愛の究極の根拠です。

そして私たちは、神の愛、無償の愛のあらわれとして十字架上で命を捨てたキリストから愛される者ということの上に、はじめてそこから自分の大切な人や味方に限定されない、敵への愛も可能になっていくのではないのでしょうか。キリストに愛された者は、愛する者となれるのです。

「私はあなたがたを友と呼ぶ」。本日の福音書の中で、最も要となるテーマの一つは、イエスが弟子たちのことを「友」と呼んだところです。私たちは、「私はキリストの友です」と言うことができるのです。

私たちにとって、イエスを主と呼ぶことはできても、友と呼ぶのは、ためらいがあるかもしれません。

心が深く傷ついている人は、自分など取るに足りない価値のない人間であり、「キリストの友」には、まるで相応しくないと思うかもしれません。しかし、そうではありません。

イエスは、「神の栄光のキリスト」であるだけでなく、「弱さと苦しみのキリスト」でもあるのです。

それは、尊厳を踏みにじられ、暴力と辱めを受け、最も低く弱き存在として、十字架上で死んでいかなければならなかった主イエス・キリストです。

あなたの心が深く傷つき、自己否定の闇の中にいるとき、神の栄光であるキリストを友と呼ぶことはできなくても、「弱さと苦しみのキリスト」の友にはなれるのではないのでしょうか。

あなたが自分一人ではとても抱えきれない罪・痛み・苦しみを、キリストが十字架上で血をもって贖ってくださったのです。

あなたが自分だけではとても背負いきれない苦しみ、一人では消化しきれない辛さや嘆きを、キリストは十字架上で共に担い、共に苦しんでくださったのです。

あなたの足元に、苦しみの血がしたたり落ちている時、それはあなた自身の血ではなく、あなたの苦しみを肩代わりしてくれたキリストの血なのです。

生きていく中では、様々なことが起こります。あなたの心に刻まれた傷が、あなたを苦しめ、生きているのが辛くなる時もあるかもしれません。

そんな時でも、あなたのために命を捨ててくださったほど、あなたはキリストから愛されている存在なのだということを、いつも覚えていてください。

「私はキリストの僕（しもべ）です」と言うよりも、「私はキリストの友です」と言う方が抵抗を感じるかもしれません。

なぜなら、「友」には「僕」よりも責任があるからです。

だからこそあえて、「私はキリストの友です」と心の内で宣言して、キリストの友として相応しい在り方、生き方をしていきましょう。

無償の愛、無私の愛が、自ずと湧き上がってこなくとも、祈りと共に、無償の愛、無私の愛、神の愛の存在の内にとどまり、日々を歩んでいきましょう。

他者に向ける、無償の愛、無私の愛は、自らの心にも平安をもたらします。

試練の時も、喜びの時も、キリストの愛にとどまり続け、私たちは共に歩んでいきましょう。

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

新約聖書 使徒言行録 10章 44節—48節（新共同訳）

<sup>44</sup>ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。<sup>45</sup>割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。<sup>46</sup>異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、<sup>47</sup>「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。<sup>48</sup>そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。

新約聖書 ヨハネの手紙 一 5章 1節—6節（新共同訳）

<sup>1</sup>イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。<sup>2</sup>このことから明らかのように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。<sup>3</sup>神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません。<sup>4</sup>神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。<sup>5</sup>だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

<sup>6</sup>この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。

教会讃美歌 292番「重荷をにないて」、238番「いのちのかて」、289番「すべてのひとに」、253番「カルバリの十字架に」 1,2,4節、266番「いま主のみ前を」。